支那漢口へ移ってゆく子に

新美南吉

お前が日本を去る日は
秋の空　紺ぺきに流れ

ひるもすずしく
蟋蟀が鳴いてる
お前を送るとてクラスのものは
小さい教室に　花をかざつて
ともにならったかなしい唱歌をうたう
お前の親しかったあの子に
花束を贈る役　命じたらば
頭をふって　拒み
「泣くから嫌です」といった
私はそんな　感傷を
好まぬけれど
真実ならば

しょうもない
お前が日本を去る日は
日本はいつものやうに
こうも美しい
お前は寂しいときに憶い出すのだ
海の東に
美しい、やさしいお前の
祖国のあることを
海の東に
五十余人の
親しいお前の友達があることを